

2022

令和4年7月10日発行（毎月1回10日発行） 通巻347号

人生100年時代 共生社会の生き方情報誌

とあるお



さわやか福祉財団

地域子育て宣言

令和四年六月二五日

（公財）さわやか福祉財団

どの子ども、その子らしく

頑張る力とやさしい思いを伸ばしていくよう、

地域のみんなで

子育てする社会にしていけます。

ともあそび

2022年7月号

CONTENTS

2 新しいふれあい社会 実現への道

地域で育む子どもの共感力 「ともあそび」のすすめ

清水 肇子

4 広げよう つなげよう 地域助け合い 挑む! 我らの地域づくり

仲間を増やしてつくる、幸せの町

佐賀県太良町

11 広げよう つなげよう 地域助け合い 活動の現場から

〃結〃の心で助け合いを目指す 自由に集えるみんなの居場所

常設型居場所 トコトコかるまい広場 (岩手県軽米町)

17「地域助け合い基金」助成先のご紹介／状況のご報告

22 連載 18 老いの暮らしを創る

ホームで暮らし始めました

福祉ジャーナリスト 村田 幸子

新しいふれあい社会づくりに向けて

- 新地域支援事業・
助け合いの地域づくり

26 北から南から 各地の動き

- その他の財団の活動 など

31 ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナー (賛助会員)・ご寄付者の皆様のご紹介

33 NEWS & にゅーす

38 活動日記 (抄)

㊤『ともあそびへのおさそい』のご紹介／㊤さわやかパートナーのご案内

㊤『さあ、やろう』vol.19のご紹介／㊤みんなの広場

㊤「払込取扱票」による振込手数料について / 表紙絵から

助け合いを広げよう! 新・ひとりごと ● 高祖 常子

地域で育む子どもの共感力

「ともあそび」のすすめ

さわやか福祉財団 理事長 清水 肇子

このところ、子どもに関する政策が大きく動いている。

報道にあるとおり、去る6月15日に、「こども基本法」と「こども家庭庁設置法」が国会で成立した。その制定の動きにちょうど重なったが、さわやか福祉財団では、このほど、2種類のパンフレットを制作した。いずれも、地域シニアが子どもたちと共に遊ぶ^①を副題とし、一つは『ともあそびへのおさそい』、もう一つは『どう遊ぶ?』QA、と題している。

元々当財団では、ずっと以前から地域で子どもを育む活動を積極的に推進してきた。子どもを取り巻く環境が昔とは大きく様変わりしているからだ。少子化・核家族化が進み、ITの広がり的一方でかつて地域が当たり前に果たしてきたつながりの機能は失われつつある。いじめ、虐待、自殺などの問題への対応がどんどん後手になっている。以前も触れたが、先進各国を比較した調査では、子どもの精神的幸福度ランキングはワースト2位という。子どもがいきいきと心豊かに育つ環境を私たち大人がしっかり提供できているとは残念ながら言い難い。

「こども基本法」は、どのような状況であっても、尊厳ある暮らしが送れるように、子ども自身の主体的な権利を保障するための基本の理念を定めている。国連の「子どもの権利条約」に

批准してから28年、遅ればせながらようやく根拠となる包括的な法律が制定された。こども家庭庁は、そのいわば司令塔だ。何をやるのか、どこまで改善できるのか。財源の捻出という大きな課題と併せてこれからの検討次第だが、もはや待たなしの状況の下、私たち地域の大人が、どう関心と関わりを持つかによって結果が大きく異なることだけは確かだ。家族や施設だけで子どもを育てられる時代は終わった。地域で支援する大人にもいきがいが生まれる「子育ての社会化」が、いよいよ本格的に重要な役割を担うことになる。

今回のパンフレットは、まずは地域がもっと子どもに注目し、特にシニアの皆さんに、持っている時間と人生経験を生かして子育てに積極的に関わってもらおうと作成したものだ。

特に、これからの社会で強く求められる「共感力」の育成に焦点を当てている。多様な価値観が前提となる社会での相互理解、主体的な参加と創造力は、これからの時代に必須の能力といえる。他者の気持ちを理解し、違いを受け入れ、そこから自身の考えを生かして新たな提案や挑戦をしていくことが要求される。これらすべてに通じるのがまさに共感力だ。

共感力は、就学前の乳幼児の段階から育成することができ、その重要な鍵が、多様な人と関わる環境であるという。「ともあそび」は、大人が身近な遊びを通して子どもと対等の目線で接するもの。どんなに小さい子どもでも一人の存在と認め合うふれあいがある子どもの心を成長させる。

こうした提言につながる研究会を、当財団では昨年から行ってきた。その内容については、9月の「いきがい・助け合いサミットin東京」の分科会でもご紹介する。この2冊はその活動実践資料だが、懐かしい遊びを含めた「ともあそび」の簡単な紹介と、とはいえ、押しつけの言動は逆効果で、子どもと接するときにどんな場面でどう心がければよいかをまとめている。ぜひ皆さんの地域の活動でも工夫しながら取り組んでみてほしい。（関連↓表紙裏及びP24）

広げよう つなげよう 地域助け合い

挑む！
我らの地域づくり



仲間を増やしてつくる、 幸せの町

佐賀県太良町

た ち ょう

佐賀県最南端の「月の引力が見える町」、太良町。干満差6メートルの有明海の干潟と多良岳から得られる自然の恵みは、うらやましい限りですが、人口約8500人の町の地域資源に目を向けると、タクシーは2台、訪問介護事業所は1か所といった厳しい現実があります。国の事業を自分たちなりに工夫し活用して、住民同士の助け合いを広げている太良町の人たち取材しました。

（取材・文／塩瀬 潔泉）

助け合いの体制づくり



「今後も地域資源が先細りしていく太良町は、少子高齢化日本の縮図。そう

いう意味では、最先端だと思っています」

そう話すのは、太良町社会福祉協議会の総務係長、中村秀貴さん（49歳）。

同町が生活支援体制整備事業を開始した2016年から20年まで第1層生活

支援コーディネーター（SC）を務めた。現在も社協の困りごと相談や組織運営を担当しながら、第1層SCの吉沢宗典さん（43歳）をサポートしている。

社協に次々と持ち込まれる家族問題や引きこもり、障がい者の孤立など、困りごと相談はとても手に負える数ではない。

「昔は強かったはずの太良町の地縁は、弱体化してしまいました」と中村さん。しかし同時に、困っている人、孤立している人を訪問し、支援していると「どうしたの？」とご近所さんが声を

(左) 町社協総務係長の
中村さん



(下) 左から、第2層SCの
岡さんと池田寿紀さん（60歳）、
第1層SCの吉沢さん。今年4
月から第2層もSC2人体制と
し、皆で集まりにくい状況の中、
個別課題への対応を優先して活
動している



かけてきてくれる。住民に関わって
もらうことで当事者への理解が進み、あ
たたく見守り、支える人が出てくる
ことも分かった。

「住民さんが変わればいろいろなこと
ができる、と確信しました」と中村さ
ん。

周囲には「なぜそこまで」という意

が抱えている課題を解決する手段にな
るかもしれないという予感があった。
15年には社協から行政に事業の受託を
申し出て、16年から県内でもいち早く
事業に着手した。

つまずき

第1層SCには、関東地方で障がい

見もあったが、困っている
人や、それを知って相談し
てくる民生委員を見て見ぬ
ふりはできず、黙々と支援
を続けた。そして、「今後
は住民同士で支え合わなく
ては、とても立ち行かない」
という思いが日に日に強ま
っていた14年、太良町にも
体制整備事業が始まるとい
う情報が届いた。中村さん
には、この事業が地域の助
け合いを広げるもので、町

者支援に長く携わり、もっと人とつな
がる生活がしたいと太良町に移住した
吉沢さんが新規に採用され、中村さん
との2人体制で事業がスタートした。
16年10月には、「太良町みらいのまち
づくりシンポジウム」を開催。佐賀県
の「NPO法人市民生活支援センター
ふくしの家」理事長で、さわやかイン
ストラクターの江口陽介氏による事業
説明や、福祉事業所が把握している住
民のリアルな困りごとを共有したほか、
その後の住民座談会につなげるための
提言などを盛り込んだ。

しかし、20数人の住民が参加してグ
ループワークを中心に7回行ったこの
座談会は、挫折してしまった。「町づ
くり」という大きすぎるテーマに、生
活支援の分野を超えて議論が際限なく
広がっていき、参加者からも徐々に、
「これ、どうするの?」と疑問の声が
上がり始めた。

「住民の支え合いというグループワークの目的を明確にしておくべきでした」と吉沢さんは振り返る。

医療・介護との連携、 第1層協議体の立ち上げ

これと同時期に、医療や介護の関係者の間でも危機感は強まっていた。「せっかく退院した人が地域に戻っても、今のままでは安心して暮らせない」



第1層協議体の様子

町立太良病院の院長が旗振り役となつて、「太良町地域包括ケアシステム研究会」として話し合いが重ねられており、目指す方向は同じ、ということ で途中から中村さんと吉沢さんも「生活支援体制整備事業班」として参加。地域課題や理想の地域像について研究し、町民に発信を続けている。

このつながりを生かして吉沢さんたちは、住民（老人クラブ関係者、民生児童委員、ボランティア活動者等）と専門職と一緒に太良町の福祉を考える勉強会を数回実施した。これが、のちの第1層協議体に発展。現在、月1回行われている協議体でも「住民&専門職」で地域課題の解決に向け、話し合いが行われている。

知る・考える・実行する 自由な参加スタイルの「さちサポ」

これからの太良町を支えるのは住民。

中村さんたちは、これまで町でさまざまな活動をしてきた住民が「仲間」として集結し、力を発揮してもらいたいと「幸せの町づくりサポーター・さちサポ」を18年4月に立ち上げた。

さちサポのコンセプトは自由な参加スタイル、「知る」「考える」「実行する」の3つだ。知るだけでもいいし、考えるのは苦手だけれど実行するのは得意という人はそれでもいい。

活動開始のきっかけとして、メンバー向けのレベルアップ研修会を実施したほか、町の配食サービスで足りない部分をどう補完するかをテーマに据え、住民への個別訪問調査を実施してみた。元太良町役場職員で第2層SCの岡靖則さん（65歳）らがメンバーとペアになり、約1年かけて調査を実施。その結果、土曜日の配食ニーズが非常に多かったことから、町議会が行政サービスとして月々金曜日に加え土曜日の配

食実施を提案し実現するという、思わぬ結果となった。

「メンバーの皆さんが同じ住民の立場で調査に行き、なぜ自分で調理ができないかなどが分かりましたし、いろいろと感じたこともあったようです。一定の結果を出せたという達成感が、次の活動への原動力になったと思います」と岡さん。

町のために何かしたいという町民のプラットフォームとなったさちサポには、現在80人ほどが登録し、自分に参加することで参加している。

「さちサポのクラブ活動『ご縁クラブ』」

さちサポの次のステップとして、メンバーそれぞれがやりたいことを「クラブ活動」としてやってみよう、ということになり、見守りや傾聴、移送など8つのクラブが誕生した。その一つ、「ご縁（五円）クラブ」は、中村さん

とクラブ代表の杉田進さん（72歳）の縁が形になった活動だという。

杉田さんは、太良町出身。長崎で三菱重工業に長年勤務し、20数年前には同社に勤務しながら太良町に戻った。定年後には、高齢者大学（ゆめさが大学）で2年、さらに大学院で1年学んだ。

「高齢者大学で学んで、人生が変わりました。ずっと会社の人脈だけで生きてきましたが、大学でいろいろな人と話す機会がありましたし、学ぶ内容も初めてのことがかりでした」

特に大学2年次の実践課程で、高齢者施設での回想法に取り組んだことが、その後の活動への大きな動機付けにな

（右）ご縁クラブ代表の杉田さん。定年後に始めた日本舞踊が趣味で、隣の鹿島市で仲間と立ち上げたレクリエーション協会の活動などもあり、超多忙な毎日



（下）ご縁クラブの皆さん。前列右から2人目が杉田さん、後列右端が山口さん、同じく右から4人目が吉岡さん



った。趣味で自宅に収集しているアンティークの品なども持ち込み、入居者に思い出を語り合ってもらったそう。 「皆さんの喜んでくださる顔を見たとき、これが、本当の幸せを届けるということかと。それならこれからも続け

てみようと思いました」。さらに、

「人生は一度きり。これからも前向きに楽しんで、少しでも誰かのお手伝いをしていけたら幸せです」と充実した表情で語ってくれた。中村さんも、

「以前から、杉田さんが地域のボランティアグループやサロン活動、駅前の花壇の手入れ、高齢者のお宅でのちょっとした修繕などの活動をされているのは知っていました。数年前に杉田さんと、困りごとを住民同士で支え合えたらいいねという話をしまして、その後クラブを立ち上げたときに『これって、ご縁だね！』ということで、クラブ名を『ご縁クラブ』としたんです（笑）。活動ごとに謝金を、5円（笑）いただきますというのも、利用者さんには『ええっ、5円?!』となってインパクトがあるし面白いね、と」と楽しそうに説明してくれた。

山口一生さん（38歳）は、ご縁クラ

ブメンバーで町議会議員でもある立場から、

「国の最小単位であるこういった活動で地域がポジティブに変われば、日本全体も変わるはず」と話す。

ご縁クラブは、現在24人で活動。窓拭きや重い物の移動、草取りなど、30分以内でできるちょっとした生活の手伝いを5円の謝金で実施し、21年度は延べ50件120人の手伝いを実施した。謝金をもう少し受け取ってほしいという人もいるので、そんなときはありがたい受け取り、赤い羽根共同募金に入れるルールとしている。受け取った5円玉もずいぶん貯まったので、それを積み上げてタワーでもつくるか、と皆で話しているそうだ。

＊回想法 グループで懐かしい品や写真を
見たり触れたりしながら、昔の思い出を
語り合う心理療法。脳を活性化し、認知
症高齢者等の精神的安定に効果的。

「高校生と一緒に、窓拭きボランティア

昨年12月、ご縁クラブは一人暮らし高齢者宅の窓ガラスを拭く活動を実施した。クラブメンバーと、学校を通じた呼びかけに応じてくれた県立太良高校の生徒11人、それに地元の施設職員の女性1人がチームを組み、高齢者宅を訪問。計23軒の窓ガラスを、年末に向けてピカピカに磨き上げた。若い人たちが来てくれるということで高齢者も喜び、お菓子を用意してくれたりしたそうだ。

この活動に参加したご縁クラブの吉岡真樹さん（69歳）は、「コミュニティが壊れてしまっても、きつかけさえあればこういった活動ができるんだと思います」と振り返る。社協事務所での昼食後には、「お礼の気持ち」として高校生たちにピアノ演奏を披露したそうだ。「そういう交流が何よりう

ケアマネと協力して認知症の人を支える 「チームオレンジたら」

太良町は認知症総合支援事業の一環として、昨年、認知症サポーターが500人を超えたのを機に、毎月勉強会を開催。そこから、町の認知症の人たちの力になろうと手を挙げた20人の認知症サポーターで、今年度「チームオレンジたら」を結成。ケアマネジャーと相談しながら、介護保険外の部分をチームオレンジが担う形で認知症の人のケアプランを立てる取り組みを行っている。

この事業を中心となって推進している、社協の地域福祉係長で認知症地域支援推進員の江藤ケイ子さんは、「チームオレンジが付き添うだけで、認知症の人の行動範囲が広がります。ご本人が前向きに生活できるようなサポートを目指します」と意気込みを語る。

この日、認知症が進んだ一人暮らしのAさん（92歳）の通院に付き添ったのは、チームオレンジたらに登録している食場^{じきば}佐津美さん。食場さんは、最近定年退職するまで町立太良病院の居宅介護支援事業所でケアマネジャーとしてAさんを支援していた。しかし、Aさんの通院付き添いを引き受けていた訪問介護事業所が今年1月に廃業してからは、どうすることもできず困っていたという。「退職したら、生まれ育った太良町や、ケアマネ時代に大変お世話になった社協さんに恩返しがしたいと思っていました。チームオレンジに登録して、心配していたAさんの付き添いもできることになってうれしいです」と食場さん。

鹿児島県在住のAさんの長女にも聞いた。

「太良町で関わってくださる皆さんが、母の話を親身になって聞いてくださり感謝しています。ちょうどチームオレンジが立ち上がって、顔なじみの食場さんが通院に付き添ってくれと聞き、とても安心しました」と電話越しに明るい声を聞かせてくれた。



町社協地域福祉係
長の江藤さん



Aさんの通院付き添いの
様子。左が食場さん

れしかった」と笑顔いっぱいに話してくれた。

作業で使用するたくさんのぞうきん

は、町内の認知症の女性が得意の手縫いで提供してくれた。

「感謝状をお持ちしたとき、その方は

ぞうきんのことはよく覚えていなかったようですが、自分が何か役に立ったのだと分かり、とても喜んでください

ご縁クラブの活動の様子



昨年12月の窓拭きボランティアの様子

行くだけでは問題は解決しないでしょう。かといって、社協さんが定期訪問しながら支援するにはとても手が足りない」

「最初の住民座談会が頓挫して、私は、いつか参加者の皆さんに恩返ししたい」と思い、これまでやってきました」と語るSCの吉沢さん。前例のない住民主体の事業に、全国でも多くの地域がつまずき、迷いながらも前に進み続けており、それらも経験しての今ではないかと感じる。町民や地域課題と真摯に向き合い、仲間を増やしていく「最先端」の町、太良町の取り組みに、学べることは多い。



「ご縁クラブから社協の応援団に

ました」と中村さん。
高校側も、生徒にもっとボランティア活動の機会を持たせたいと考えており、今後は年間を通してご縁クラブと連携していく話が進行中だ。

良町に戻った。活動する中で、町が抱えるさまざまな問題が見えてきたそう
だ。

「ご縁クラブの活動はちょっとした困りごとを支えようというものですが、実際に活動してみると、困っていることと、それほどでもないのかな、というこの線引きが難しいと感じるときがあります。一方で、本当に深刻な状況にいる人は、ご縁クラブで手伝いに

吉岡さんはそんな状況に少しでも力になろうと、協議体で社協の「応援団」としても活動しよう、と呼びかけた。現在は仲間と3人で、ご縁クラブの「ちょっとした」を超える支援で中村さんたちを支えている。

* * *

広げよう つなげよう 地域助け合い

活動の現場から



「結」の心で助け合いを目指す 自由に集えるみんなの居場所

常設型居場所 トコトコかるまい広場（岩手県軽米町）
かるまいまち

人口減少、高齢化が進む地方の町で、助け合いのまちづくりのための拠点として開所された「トコトコかるまい広場」。住民有志で「居場所づくり実行委員会」を結成し、活動への理解を深めて協力者を増やし、数々のハードルをクリア。地域みんなでつくり上げた居場所では今、新たなつながりが生まれ、楽しみを分かち合いながら支え合いが広がり始めています。

（取材・文／城石 眞紀子）

アットホームな空間で
多世代が自然に楽しく交流



岩手県の最北端、青森県境に位置する、人口約8500人の軽米町。豊かな

な自然に囲まれた美しい花風景と雑穀文化を有する同町だが、人口減少に歯止めがきかず、高齢化率も町全体ですでに42%。50～60%超の地域も出てきていて、過疎化と少子高齢化が大きな

課題となっている。

こうした中で、地域で住民が支え合うための生活支援体制整備事業が開始。軽米町でも助け合いのまちづくりに向けて取り組む中で、子どもから高齢者

まで誰もが気軽に集い、自由に過ごせる交流拠点として開所したのが、町内初となる常設型居場所「トコトコかるまい広場（トコかる）」だ。

居場所は町中心部にあり、商店街にも近い利便性の良い場所。1999年の豪雨水害で被災し、使われなくなった住居兼事務所の空き家を地域住民が



空き家を改修してつくった居場所



居場所利用者の様子

協力して改修。明るく開放的なスペースに仕上げた。開所日は毎週水・土曜日の午前10時から午後3時30分。住民有志らで組織する「居場所づくり実行委員会」が運営を担い、現在は20名ほどの運営ボランティアがいる。

トコかるを訪れた、とある水曜日の昼下がりには、利用者と運営ボランティアあわせて10名ほどがいて、おしゃべりをしたり、新聞を読んだり、庭の草取りや掃除をしたりと、思い思いの時間を過ごしていた。時折聞こえてくるにぎやかな笑い声。アットホームで何とも居心地のいい空間だ。

利用者の一人で

常連だという女性は、認知症の父親を伴って来所。「在宅で介護をしているのですが、家に2人きりでいると煮詰まってしまう。でもここに来れば、皆さんが父の見守りをしてくれるし、私自身もいろいろな方とお話ができるから気が紛れるんです」と笑顔を見せる。ほかに、一人暮らしの高齢者がお茶を飲みふらりと遊びに来たり、ピアノが置いてあるのでそれを弾きに来る常連さん、買い物帰りにトイレを借りに立ち寄る人たちなどもあるそうだ。

「近くにある軽米小学校の通学路にもなっているので、土曜日は子どもたちでにぎわいます。ここに置いてあるゲームで遊んだり、宿題をしたり、駄菓子が置いてあるのでそれを楽しみに来る子も。また、毎月12日は居場所バザー祭も開催していますが、ちょっと距離が離れている地域から車に乗り合わせてやってくる方たちもいるんですよ。



バザー祭の売り上げ金を運営資金に

コロナ禍もあって、開所に至るまでにはいろいろな苦労もありましたが、各方面から支援や助言もいた

「軽米町では、18年10月に第1層協議会『かるまい結つこの会』が発足しました。会議の中でこれからの目指す地域像について話し合いを重ね、まずは助け合いに関心のある人を増やしていくことを目的に、20年11月に町全体を対象にした地域づくりフォーラムを開催。さらに、参加者の中からアンケート記名者と呼びかけて地域づくり座談会を開いたり、助け合い勉強会や小学校区ごとの地域交流会などを重ねてきました。

大きながらくさんの善意に支えられて、ここまで来ることができました」
こう語るのは、居場所づくり実行委員会の代表で、現在はトコかる代表を務める佐藤勝子さん（72歳）。

地域づくりの第一歩 実行委員会が居場所立ち上げ

トコかる立ち上げまでの活動プロセスを、軽米町役場の松浦博子さんに振り返ってもらった。

そうした中で、『自分たちも何かをしたい』という気持ちを持っている町民が多くいること。また、『気軽に集える居場所がほしい』『有償ボランティアを立ち上げてほしい』といった地域ニーズを把握することができました。そこで、何から取り組むかを再び話し合った結果、まずは居場所が出来上がることが助け合いの地域づくりにもつながるのではないかとということで、21

年度の目標として、町内にモデルとなる居場所を立ち上げようと決めたのです」

結つこの会では先進的な取り組みをしているさまざまな居場所を視察し、軽米町にはどんな居場所が合うのかを検討。モデルにしたのは、新潟市の地域包括ケア推進モデルハウス「実家の茶の間・紫竹」。決められたプログラムに参加するのではなく、空き家の民家を改装することで、実家の茶の間のような安心できる生活空間を再現し、そこでそれぞれのペースで思い思いのことをして過ごすというスタイルだった。ところが、立ち上げに向けて応募した複数の助成は、要件を満たしていないということで全て落選。

「気落ちして、資金面での不安があるので公民館など従来からある建物を使ったほうがいいのではないかとこの意見も出るなど、話し合いがまとまらない時期もありました。そんなときに、か

ねてから支援をいただいていたさわやか福祉財団の鶴山さんから、『空き家でやるのなら、協議体と別に実行委員会を結成してみるのも一つの方法では』との助言をいただきました。そこで、結つこの会は地域づくりの仕掛けを考える本来の協議体としての役割に戻り、別組織として有志が『居場所づくり実行委員会』を結成したんです。そこからオープンに向けての取り組みが始まりました」

みんなの熱意、工夫、行動力で わずか2か月で居場所が開所

居場所づくり実行委員会が実際に動き始めたのは21年8月末。居場所候補となる空き家の目星は付けていたが、最大の課題は改修などにかかる初期費用をどう捻出するか。このとき素早く動いたのが、行政と住民のパイプ役となる生活支援コーディネーターの中里早苗さんだ。

「実行委員会代表の佐藤さんと私で、『どうにかなりませんか』と町長のところに相談に行きました」

軽米町では協議参画による地域づくりを推進していくため、町民が主体的かつ主体的に

取り組む事業に対して、予算の範囲内で支援金を交付する「軽米町協働参画地域づくりチャレンジ事業」がある。21年度の募集スケジュールは終了していたが、幸い、予算がまだ残っていたこともあり、追加申請が受理され審議会で交付が決定した。

「ただし、年40万円の支援金の申請をするには、3分の1は自己資金を持っていることが条件でした。それで広く寄付を募ることにしたのですが、人さ



開所準備には地域住民に加え、高校生ボランティアも活躍

まからお金をいただくにはまず自分たちからと、実行委員会のメンバーが『出資金』という名目でへそくりを出し合って、自己資金20万円強を捻出しました」とは佐藤さん。

これに加えて、地域住民、商店の寄付金が10万円。当財団の「地域助け合い基金」にも応募し助成を受けた。

助け合いの地域づくりをしようと呼びかけても、1回ではなかなか活動の趣旨は伝わらないが、「お金がない中、

住民主体でやっていることを繰り返し伝える中で活動の趣旨に賛同してくれて、電気工事屋さんが格安で工事してくれたら、腕に覚えのあるボランティアが町内の工務店から材料を譲り受けて、トイレを完成させました」（佐藤さん）。話し合いの場では、「まだどういうものが出来るか、上がるかわからないうちに寄付は出せないのではないかな」というマイナスイ見も多かったが、実行委員会ができて「開所します」「ボランティアを募集します」といったチラシを配りながら事情を話すと、予想以上に多くの人たちが協力を申し出てく



トコかる開所式

れて、実際に行動を起こすことの大切さを実感したという。

居場所内で使うものは、家具、じゅうたん、カーテン、冷暖房器具といった大物から、食器、本、メモ帳などの備品まですべて寄付物品で調達。さらに開所までの準備では、地域住民に加えて県立軽米高校の生徒30人ほどが協力を申し出てくれて、空き家の掃除に荷物の運び入れにと大活躍。実行委員会立ち上げからはトントン拍子で準備が進み、同年11月3日、晴れて開所式が行われた。

「みんなの気持ちが一つになったからこそ、できたこと。あらためて軽米町の住民力のごさを見た思いでした」（佐藤さん）

交流の拠点から気持ち高め いずれ助け合いの拠点へ

開所から半年以上が経過。トコかるの副代表で運営ボランティアもしている永井美保子さんは、「人が集まるところが好きだし、おしゃべりも好き。もともと根がおせっかいなものだから、少しでも人さまのためになればと思って活動に参加したけれど、仲間もできて楽しいですよ」と言い、佐藤さんは「居場所ができたことで利用者同士や実行委員同士の交流が深まっている」と話す。

月に1、2回は運営会議も開いていて、資金繰りや運営方法などを協議。毎月いろいろなイベントを企画して、夏には夏祭りを、庭の畑でみんなで野菜を育てて秋には生誕祭を計画。利用者たちの声を聞いてバザーを常設にしたり、夏季には開所時間を夕方5時からいまで延長することも検討している。

また、「自由を集えるのはいいけれど、初めてのところに目的もなく来るのはもしかしたら逆にハードルが高いのでは」との意見もあり、4月から毎月第4水曜日の午前中は、保健師や地域包括支援センター相談員らによる「なんでも相談会」も始めた。その日の当番の運営ボランティアが、手芸など自分の得意なものを披露しながら一緒に楽しむ時間も設けるなど、臨機応変な運営でどんどん楽しい場所へと進化を遂げているようだ。「もう一つの課題である有償ボランティアについても、いずれは少しずつ始めていけたらと思っています。ささいな日常の会話からも、行政に相談するほどではないけれど、買い物に不便をしていたり、ごみ出しが大変とい



トコかるメンバーの皆さん。後列左から2人目が代表の佐藤さん、同3人目が副代表の永井さん

った困りごとが聞こえてきているので、それらのニーズをしつかり受け止めて次のステップへとつなげていきたい。居場所での幅広い世代の交流を通じて、軽米に昔からある助け合いの「結」の気持ちを含んで高め、住民同士の助け合いの拠点を目指して活動を発展させていきたいと思います」と佐藤さんは抱負を語る。

軽米町には3つの小学校区があるが、トコかるが立ち上がったことで他の小学校区からも「地域で勉強会をしたい」「うちの地区でも居場所ができないか」との声が上がっているという。支援合いのまちづくりに向けた取り組みは、まだまだ始まったばかり。町全体にこの住民力が広がっていくことを期待したい。

常設型居場所 トコトコかるまい広場

子どもから高齢者まで、すべての人が気軽に集えて自由に過ごせる居場所。住民有志のボランティアが運営し、幅広い世代間交流や住民同士の助け合いの拠点を目指している。開所は、毎週水・土曜日の午前10時～午後3時30分。利用料は無料としているが、大学生以上の利用者には活動継続のための協力金（100円～）への協力をお願いしているほか、寄付金・寄付物品も随時受け付けている。

●連絡先／〒028-6302

岩手県九戸郡軽米町大字軽米8-1

電話 070-4449-3344

応援ありがとうございます！

「地域助け合い基金」助成先のご紹介

皆様のご寄付を原資に、さまざまな世代・人々が参加する地域共生社会への取り組みや、コロナ禍での困りごと解決のための活動を支援している「地域助け合い基金」。今月号は、カーシェアリング、屋外サロン、不登校家庭への支援活動を紹介します。

なお、このほかの助成先団体の活動報告も財団ホームページに続々アップしていますので、思いが詰まった多彩な活動をぜひご覧ください。

宮城県石巻市

カーシェアリングで支え合う 地域づくり

大門町カーシェア会

助成金額 15万円

大門町カーシェア会は、東日本大震災の被災地で人口減少と高齢化が進み、近所にスーパーや病院がなく移動困難

者が増加していること、また、復興住宅に入居している方の多くがご近所とのつながりが失われていることを改善するため、住民有志が立ち上げ、日本カーシェアリング協会の仕組みを活用しています。

1台の車を地域で共同利用し、高齢者の通院や荒天時の学生の通学等の「外出支援活動」、買い物難民改善を目的とした乗り合いの「買い物ツアー」、交流とレクリエーションを目的とした「お出かけツアー」、毎月の行事予定等を個別訪問で配布しながら見守り声かけ活動等を実施して

います。

ツアー参加費等から車両の維持費等財源の大部分を賄っていたため、コロナの影響を受けてツアー活動を自粛すると、活動の継続が厳しい状態になりました。しかし、日々の暮らしに不可欠な外出支援のニーズは高く、何とか活動を継続させたいと本基金に応募されました。助成金は、車両のレンタカー代に充てられ、これまで通り外出支援を継続でき、地域の暮らしの足を維持することができました。

利用者からは、「通



車の前で集合（右）と、買い物ツアー（左）

院に便利で助かっている」「ご近所づきあいや日常生活が豊かになった。これからも続けてほしい」といった声が聞かれたそうです。「今後も活発に活動を行い、同じ地域に住む方々とあたたかい地域をつくっていけたら」と報告を寄せてくださいました。

群馬県高崎市

どのような方でも 役割を持ちながら参加できる場

ばーば達のお花畑

助成金額 15万円

ばーば達のお花畑は、コロナ禍であっても地域の高齢者や一人暮らしの方が気兼ねなく集い交流できる居場所、身体を動かし運動機能を維持できる介護予防の場について検討を重ねてきました。そして、耕作放棄地をご厚意により無償提供していただき、花や野菜を作る屋外サロンとして立ち上がりました。

参加者には、男性や軽度の認知症の方、足腰の不自由や孤独等を抱えている方もいます。元気に住み続ける



料理（左）と、農作業（右）



ことができる地域
づくりに寄与でき
るよう、無理なく
役割分担しながら
取り組んでいます。

助成金は、ロゴ
入りエプロン、農
具、農資材、収穫
できた野菜を使っ
て料理するための
調理器具等をそろ
えるために活用さ
れました。

参加者からは、
「サロンに参加す
ることは気が引け
てしまうが、畑仕
事なら混ざりた
い」「屋外での活
動なので、コロナ
の心配もせずに活

動ができる」といった声や、参加者の家族からは、「認知
症を発症した母が通える場ができ、とても助かっている」
という声が聞かれるそうです。

買い物に行くことが難しい高齢者に野菜を届けることや、
一人暮らしの方へ野菜を届けると同時に、地域の見守り活
動につなげる予定とのことです。また、収穫した野菜を料
理し、食を通してみんなが交流できる居場所づくりや、地
域の保育園や育成会とも連携を図りながら収穫体験会を実
施するなど、多世代交流にもつなげて、少しずつ地域との
連携を模索していく、と今後の展望を寄せてくださいまし
た。

千葉県松戸市

コロナの影響により増加した 不登校家庭を支援

共育ステーション 地球の家

助成金額 13万円

共育ステーション 地球の家は、既存の学校システムに
合わない子どもたちとその家族が集まり、「子どもたちに

は、安心できる場所・自分らしく居られる場所で、自分のペースで活動・交流し、少しずつ自分の軸を育てていき、やがて、自分のタイミングで、世の中に羽ばたいてほしい」という想いで活動しています。

コロナの影響により不登校・ホームエデュケーションの家庭が増加しており、孤独をなくし悩みを解決に向けていくために、子どもたちと保護者同士がつながるための機会をさらに必要と考えられ、助成金を活用して交流会を3回1泊2日の交流会を1回開催したということです。

交流会は、不登校を経験した中学生や社会人の経験談を



不登校 ホームエデュケーション家族 おしゃべり交流会

不登校やホームエデュケーション（家庭を拠点とした教育）など、
「学校外で育つ子ども」がいる家族のためのおしゃべり会です。
日々のモヤモヤや悩みをみんなて話し合ってみませんか？

12月23日（木）
13：30～15：30

～第1部～ 不登校・ホームエデュケーション Q&Aタイム

事前質問や当日出た質問を取り扱っていきます。

- ・学校とのやり取り
- ・生活リズム
- ・学習
- ・ゲームや動画について など



～第2部～ 保護者おしゃべりタイム

「不登校グループ」と「ホームエデュケーショングループ」に分かれて少人数でおしゃべり。

日々の不安をスッキリさせましょう。



【会場】岩瀬自治会集会所

- 交通 JR松戸駅 東口より徒歩9分
- 住所 千葉県松戸市岩瀬38

↓詳細・お申込はこちら↓



【お問合せ】

■共催
ゆるっと♪不登校の親の会
共育ステーション 地球の家



【ご案内】

- イベント対象
不登校・不登校・ホームエデュケーションの保護者・お子さん
- 募集人数 20名（先着順）
- 参加費 1家族 500円
※保護者のみの参加、親子参加どちらでもOKです。
※当日会場でお支払いください。

担当： 共育ステーション 地球の家

■協力
ふれあいスクール 一歩（いちだ）

■助成事業
さわやか福祉財団「地域助け合い基金」助成事業

聞く機会や不登校進路相談、グループに分かれての少人数でのおしゃべりタイム等々を設けて行われました。関東圏のほか、関西圏や北海道等さまざまな地域から集まった参加者からは、「他の方の悩みを共有できてよかった」「似た境遇の人の話が聞けてよかった」等の感想をいただいたそうです。

1泊2日の交流会は、大人・子ども10名が参加。不登校

交流会（上）と、交流会告知のチラシ（下）

「地域助け合い基金」 状況のご報告

・ホームエデュケーション家庭は親子の時間が一般家庭よりも長くなりますが、交流会が家族以外との時間となり、保護者からは「子どもにも私にも安心の場所があることが

ありがたい」と感想をいただいたそうです。今後も、学校が合わずに居場所を見つけれない子どもやその家族に必要な情報が届くよう、活動していくとことです。

皆様のご支援により全国各地の助け合いを助成している「地域助け合い基金」。

6月15日までの状況をご報告いたします。

(6月15日 当財団ホームページ開示時点)

◎寄付受付額

212件

3146万3336円

このほかに当財団より1億円を供出

◎助成実行額

730件

1億1961万9045円

コロナ禍を乗り越え、地域共生社会を実現する活動のスタート・継続が促進されますよう、引き続き皆様のご支援・ご寄付をよろしくお願い申し上げます。
(事務局長・内田)

当財団ホームページでは毎日、寄付と助成金額を開示しており、助成可能な金額もご覧いただけます。寄付や助成をお考えの方は参考にしてください。



クレジットカード
決済ページ



財団ホームページ内
基金関連ページ

●基金に関する情報、
およびクレジット
カード決済は、
QRコードもご利用
ください！

基金に関するご意見・お問い合わせ

<地域助け合い基金担当>

電話：(03) 5470-7751 FAX：(03) 5470-7755

メール：tasukeai-kikin@sawayakazaidan.or.jp

ホームで暮らし始めました

福祉ジャーナリスト 村田 幸子

ホームで暮らし始めて1カ月ほどになります。長年にわたって築いてきた生活を再編するのだからストレスがたまるのは当たり前と考えるはいましたが、幸い体調を崩すこともなく、何とか新しい所に落ち着きました。部屋の前は濃淡様々な緑一色。早朝から鳥の声が聞こえ、植物や野鳥が好きな私は、今の居心地に十分満足しています。

「ともだち近居」と名付けた住まい方に終止符を打ち東京に戻ってから、私が真剣にこれからの住まい方について考え始めたのは、1年半ほど前からでしょうか。身体のあちこちに不具合が出てきました。足腰の悪さ、腸の

不調、薬に頼らなければ眠れない等々。これらはもともと抱えていた疾患なのですが、まるで申し合わせたようにすべての状態が悪くなりました。今日は整形、明日は消化器、次は歯医者に皮膚科と、手帳はクリニック通いで埋まっていました。また母が亡くなった後の家は、一人の暮らしにはいささか広すぎました。マンションにしては広い庭もあり、植木屋さんとああでもない、こうでもないと話しながら長い事かけて好きなようにつくり上げてきたお気に入りの庭です。庭木の成長を楽しみ、鉢植えの手入れをし、水やりや落ち葉掃きをし、水鉢にやってくる小鳥た





ちを飽くことなく眺めていたものです。しかしそうした楽しみすらも重荷に感じ、むしろ手入れが行き届かなく次第に弱っていく植物たちをみていることでストレスが溜まり、イライラすることが多くなりました。もう少し暮らしを小さくし身の丈にあったものになければならないあと本気で考え始めた矢先、友人たちが入居していたホームから「お部屋が空きましたが、村田さんいかがですか。一度見にお出で下さい」と連絡が。コロナ前に友人の部屋に遊びに行ったことがあり多少は見知っていた所です。提示された部屋は2階、南向き、広さは暮らしを小さくしたいと願っていた私の考えに見合うものでした。長いこと福祉の現場を歩き続け、高齢者の住まいもかなり取材してきた経験から考えても、まあ納得できるかなと思いました。しかし体調悪化の時だっただけに弱気になっているのではないかと、相当自問自答しました。しかし結

果、決断。「可愛がつてきた庭をそう簡単に見捨てられるの」と詰問調で言ってくる人がいたり、「あら、終の棲み家を決めたの。おめでとう。何かお祝いしなければね」と、決断を喜んでくれる人もいました。

私たちの世代は、就職、結婚、転勤等、何度も転居を経験してきています。一昔前のように要介護や病気になってやむなく在宅生活を諦めたとか、子どもに勧められて転居するというだけでなく、自発的に新たな高齢期の暮らしをつくり上げたいと考える人がかなり増えてきています。私も、そうです。とかく人生の仕舞い支度ねとか終活？と言われがちですが、私は、これからの人生が長からうが短からうが、自分がやりたいと思うことに存分にエネルギーを注げるよう環境を整えたいと考えたのです。ホーム入居はこれからの生活設計を考える上での、一つの大きな選択でした。



(むらた さちこ) 立教大学英米文学科卒業後、NHKにアナウンサーとして入局。報道番組のリポーターや社会性のある硬派の番組を中心に担当。1990年、解説委員に就任。NHKスペシャル「あなたが寝たきりになった時」、NHKモーニングワイド「高齢化社会」のキャスター他、多くの番組を担当。2004年、解説委員を退任後も高齢者問題の第一人者として活躍中。



地域シニアが 子どもたちと共に遊ぶ ともあそびへのおさそい

地域の宝である子どもたちを地域の人々で
育てることは、子どもの共感力を育むことにつ
ながります。

当財団では、地域シニアと子どもたちとの
「ともあそび」の種類や始め方などを掲載した『ともあそびへのおさそい』と、
子どもや保護者との関わり方、知っておきたいことなどをQ & Aとしてまとめ
た『「どう遊ぶ?」QA』冊子を制作しました。

地域での多世代交流、ボラ
ンティア活動に、どうぞお役
立てください!



◆本体、送料とも無料
当財団ホームページからダウンロード
もできますので、ご利用ください。

子どもと遊ぶときの 注意点②

言葉かけの ポイント

29 子どもにどのように声をかけら
うのかわかりません。

まずは、「おはよう」「こんにちは」など、挨拶する
ことが始まります。しやがも、おもちゃとして手
どもと距離の近さを合わせましょう。言葉に話しか
けたり、「一緒に遊んであげてねえ」と言葉に話しか
けたり。子どもが話しかけられ、おもちゃを手を移し
しめたり、遊びたい気持ちが伝わり始めてきます。
そのときに大切なのは、「こうやって遊ぶものだよ」
などと決めつけて伝えないことです。子どもはいろいろ
な遊び方を模索しています。遊びの最初は、子どもの
「やってみたい」に寄り添うこと。「正しい遊び方を教
えよう」などと考えないこ
とです。「そんな遊び方も
あるんだ」と、子どもに驚
つかれることもたくさん
あります。楽しかながら接
していきましょう。

30 女の子なのに靴いごををする、
男の子なのにピンクの洋服やス
カートをはいて来る…。「女の
子らしく」「男の子らしく」と
注意したいのですが…。

「女の子らしく」「男の子らしく」は固定観念。お
もちゃや色、洋服、遊び方や物の遊び方は男女の区別が

ありません。その子らしく遊び、楽しめていることを尊
重しましょう。「男の子に、これくらいできないかな
ずがしい」とか「女の子に負けるなんて、あつとない」
といった言葉かけも、子ども自身を傷つけるので、
気をつけましょう。

また、服装などを通して、「運動好きは男性」「家
でこもるのが女性」など、自分自身が意識にとら
えていることもあります。子どもと接するとき、そのよ
うな偏った意識がけをしないよう、ときどき意識して
みるようにしましょう。

31 友だちが遊んでいる輪に入りた
いけれど、入れなくて困ってい
るみたい。どんな風に声をかけ
ればよいですか?

子ども自身にもタイミングがあります。輪に入れな
いことは、友だちの様子をうかがっているのでもし
ょう。無言で入り込む輪に入れないのは当然のことあり
ます。まずは自分自身が友だちの輪に入って一緒に遊
んでみて、その様子を見てから「一緒に遊びたいの
と声をかけ、きくかけをしてみるのもよいと思います。

32 きょうだいで遊びに来ている上の
子、言うことを聞かず、「お兄
ちゃんなのに、できないと駄づか
しいよ」と言っていました…。

「お兄ちゃんなのに、できないと駄づかしいよ」など、
きょうだいで遊びに来ている上の子、言うことを聞
かざるのは当然、家庭ではきょうだいの関係で育て
ている。または、もともとそのようなことが上手という
こともあります。比較して、子ども自身を見て、遊びに
に寄り添うことが大切です。

集中力があつて家で遊んでいるのがわかるが、外で
ストレスをため込んでいるのかもしれない。こんな
ときや集中力があつてもいい「楽しむ」の大切、い
つか「遊ぶ」でまたストレスを解消させることができ
たら、すきするこもあつてきます。

また、靴を履くなどが難しければ、履きやすいよう
にサポートしたり、「こうしたらできるよ」と寄り添
うのもよいでしょう。

◎ お問い合わせは当財団まで ◎

電 話 (03) 5470-7751 メール mail@sawayakazaidan.or.jp

新しい ふれあい社会づくりに 向けて

ふれあい

いきがい

助け合い

さわやか福祉財団は、子どもから高齢者まですべての人が、
それぞれの尊厳を尊重しながら、いきがいをもって、
ふれあい、助け合い、共生する地域社会づくりを一貫して進めています。
特に現在は、全国自治体が新地域支援事業で取り組んでいる
住民主体の助け合いの地域づくりを強力に支援しています。
どうぞ、皆様の地域の情報もお寄せください。

● 新地域支援事業・助け合いの地域づくり

北から南から 各地の動き

● その他の財団の活動 など

ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナー（賛助会員）・
ご寄付者の皆様のご紹介

NEWS & にゅーす

さわやか活動日記(抄)





新地域支援事業・ 各地の動き

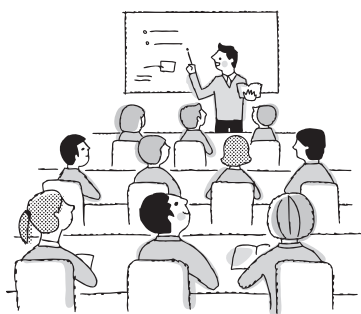
(2022年5月1日～31日)

●全国各地で、

推進の支援をしています

●活動の一部を紹介しています

SCⅡ生活支援コーディネーター



住民に参加を呼びかける支援

(住民対象のフォーラムや勉強会の支援等)

広島市 (広島県)

17日／広島市東区で「大人のための社会参加と生きがいづくり体験講座」が開催され、当財団も協力。講話と「助け合い体験ゲーム」、ミニワークを行った。同講座は高齢者の社会参加を推進する目的で企画された全5回のもので、双葉地域包括支援センターと東区社会福祉協議会の共催となっている。第1回は今年1月7日に実施されたがコロナの影響で中断、ようやく再開した。

感染対策を充分に行った上で体験ゲームを実施、「助けて」という一言から始まる「人とのつながり」を実感してもらった。今後、交流会(第3回)、活動体験(第4回)、まとめ(第5回)を経て、参加者の地域デビューへとつながっていく予定。

(高橋)

SC研修・情報交換等に協力

群馬県

10日／群馬県が県レベルのバックアップとして取り組むブロック別の連絡会で、西部ブロックの会議が開催され、当財団も推進協議会として協力した。今回は、普段現場の状況を把握する機会が少ないことや、上長との意識合わせの重要性などについて意見が出され、勉強会の企画について協議を進めた。同県の西部ブロックでは、生活支援体制整備事業を基本に、日々の取り組み状況の共有など、SCらが横の連携を積極的に進めている。

15・31日／群馬県でSC養成研修が開催され、当財団も推進協議会として協力した。群馬県ではこうした基礎研修に加え、県を5つのブロックに分割した意見交換会の機会を県レベルのバックアップとして展開している。SCはじめ関係者がネットワークを強化しつつ、生活支援体制整備事業を基本にし

た地域包括ケア推進の取り組みが進められている。

(長瀬)

大野市(福井県)

11日/大野市で今年度から新たにSCとなった人(社協、在宅介護支援センター)と行政担当者を対象に初任者研修会が行われた。当財団からは、SC・協議体の役割と3ステップについて説明した。研修参加者は、これから新たに第2層協議体を編成する地区を担当するSCであるため、ステップ①については具体的事例を交えて説明した。随所に質疑や意見交換を行いながら、住民主体の活動創出までのプロセスを共有した。

広島市(広島県)

17日/市内の第1層・第2層の新任SCを対象に「生活支援コーディネーター新任研修会」が開催された。行政から市内の状況と取り組み方針を、当財団からSC・協議体の役割と具体的取り組みを説明した。

続いて市社協から、第1層SCと第

2層SCが連携して取り組んでいる事例について報告があった。参加者の半数以上はオンライン参加だったが、チャットによる質問等もあり、担当地区の取り組み推進に向けて前向きな気持ちで伝わってくる研修会となった。今後、市社協では第1層SCと第2層SCが意見交換できる場を増やしていく予定である。

(高橋)

協議体の活動・編成等に協力

吉川市(埼玉県)

23日/吉川市中曾根小学校区第2層協議体が開催され、当財団もオブザーバー参加した。同協議体は、中曾根小学校の各自治会から参加者を募り、勉強会を経て立ち上がった。

自治会単位ではなく小学校区で自治会が横断的・継続的に話し合うメリットや、小学校区全体で活動を創出する場合、モデル地区で活動を創出しそれを地域全体に広げていく場合など、第2層協議体における活動創出のパター

ンについて、第2層SC兼行政担当者が説明。第1層SCから具体例として同市内他地区の事例が補足された。フールドパントリーのような活動は、自治会単位ではなくもう少し広い範囲で行うことで利用者が応募しやすく、活動する場合でも食材集めへの協力が得やすいことが報告された。

以上を受けて、自治会を越えた3グループに分かれて話し合い、全体発表で共有。さまざまなアイデア・意見が活発に出され、一つにまとめることは難しかった。このため、次回も活動の具体化に向けた話し合いを続けるとともに、自治会ごとの取り組みの情報共有の場にもしたいと、参加7自治会が冒頭に取り組み状況を報告することが提案され、実施することになった。

今回の協議体では、自治会単位でなく小学校区で話し合うことで、担い手確保やノウハウを共有し、面として活動を広げる協議体の意義を理解いただいたと感じる。協議体が軌道に乗るま

* 3ステップ: ステップ①体制づくり、ステップ②ニーズと担い手の掘り起こし、③助け合い創出

で、継続的に支援を行う予定。（岡野）

川島町（埼玉県）

12日／川島町第1層協議体会議が行われ、当財団も協力。メンバー交代があり、生活支援体制整備事業の認識を統一するため同事業の説明を行い、第1層・第2層協議体の役割と、同町のこれまでの協議体の歩みを紹介した。

今年度は、コロナ禍で自粛していた第2層協議体の活動再開支援を中心に行うこと、コロナ禍でも活動を進められるように、今後はオンラインも活用できるように企業との協力を得て「スマホ講座」を複数回開催することがSCから提案された。

同町は、第1層協議体委員が現場の状況を知るためにも、各委員が担当の第2層協議体を持ち、活動の支援を行う方式を取っているが、コロナ禍のため支援が止まっており、新規委員も第2層協議体に参加できずにいる。活動を再開した地域から順次、第1層協議体委員をつなげていく方針であること

も報告された。また、コロナ禍で中止が続いた「第1層・第2層協議体合同研修会」も計画に盛り込み、年度末開催に向けて第1層協議体主催で検討していく。

31日／川島町の第2層協議体合同会議に当財団も参加し、各地区の第2層協議体の現状と今後の活動に対するアドバイスを行った。

コロナ禍でもすでに活動を再開している地区では、協議体が立ち上げたサロンでの配食や、認知症サポーター養成講座を開催する計画が報告された。財団から、しゃべらずにできる映画鑑賞等でサロンを再開しているだけでなく、配食などの活動を新たに展開しており、コロナ禍でも地域に必要な活動とされる活動を創出できていることは素晴らしい、サ



ロンで認知症サポーター養成講座を行うという計画は地域で認知症を支えていくきっかけとなる良い企画であり、協議体でも認知症の人をどう支えたらよいかを話し合うことを勧めた。

子ども食堂をフードパントリーに変更した活動を支援している地区では、料理がしたくて参加していた高齢者の参加が途切れてしまったという。財団からは、そうした人も参加できる新たな活動を提案することを勧めた。まだ活動が再開できない地区では、「散歩から始めてみては」といった協議体から出された意見を具体化し、過去のやり方に固執せずにできることから始めてみることを勧めた。また、協議体としてではなく、一住民として地域の生活支援を行い、協議体で情報共有することなどの方法も紹介した。

また、協議体のメンバー交代を行い、活動推進に積極的な女性が副リーダーとなってサロンを再開した地区もあった。財団からは、協議体は状況に応じ

て柔軟に対応してよく、地域にとつてやりやすい体制でのまま進めてほしいと話した。10月に地域の地縁関係者向け勉強会



を企画した地区では、当日の勉強会に向けてSCと継続的に企画を話し合っていくこと、当日は説明などで財団が協力することが決まった。その後SCより、地域ケア会議で上がった「地域のつながりが薄い」「本人支援・ケアラー支援」を地域課題として共有し、今後SCがケアマネジャー等の専門職と民生委員をつないだり専門職による同町八幡地区の居場所見学等を行い、専門職と地域とのつながりづくりを進めていくことが共有され

た。最後は第2層協議体同士による意見交換会を行った。(岡野)

東郷町(愛知県)

24日/東郷町では、昨年度準備を進めてきた勉強会を開催し、年度末に協議体が発足した。今回は、その協議体の話し合いの場に当財団がオンラインでオブザーバー参加し、その後関係者と意見交換を行った。協議体の話し合い自体はまだ3回目だが、コミュニティバスの試乗など、住民目線の積極的なアイデアが数多く出されていた。構成員それぞれが主体的に地域の助け合い創出に向けた検討を進める様子が印象的で、関係者もちょうどよい距離感を取りながらバックアップを進めている。まだまだ手探りの状況はあるが、今後の「住民主体」の活動創出への発展に大きく期待がかかる。(長瀬)

大野市(福岡県)

11・12日/11日夜に開催された大野地区協議体に当財団も参加。市内でも人口の多い大野地区は、参加意思を示し

た住民を中心に昨年9月に第2層協議体が編成された。現在、協議体を住民に周知するためのチラシを作成中で、今回は「この言葉で住民に伝わるか」など、住民目線から多くの意見が出ていた。今後、分かりやすいチラシを完成し、住民に配布していく。

翌12日午前には、第1層・第2層SCと行政による「SC連絡会議」に参加した。この会議は毎月実施されており、SCが担当する各地区の取り組み状況を共有するとともに、ちょっとした課題についても報告し対応策について皆で協議している。この会議での積み重ねは、後発の協議体の効率的な運営にもつながっている。(高橋)

越前町(福井県)

18・21日/越前町では第2層協議体はまだ編成されておらず、早期設置を目指している。今回、県が実施する「地域支え合い生活支援体制整備事業」(第2層協議体立ち上げ支援)を活用して勉強会が実施され、当財団も協力

18日はまず、取り組みの方向性と住民主体の活動創出のプロセスを市と市社協で共有、同町のこれからの取り組み戦略の基盤とした。

21日は、第2層協議体の圏域や立ち上げ手法について協議を行った。結果、市内8ブロックの小学校区相当を第2層圏域とし、まずはモデル地区を選定して協議体を編成していくこととなった。編成方法は同じ福井県の大野市の取り組み事例を参考に、準備会を3回程度開催、地域を良くする思いのある住民を集めて編成していく。

今後はできるだけ早く1回目の準備会を開催し、協議体発足を目指すとともに、他地区での協議体設置も進めてく予定である。

(高橋)

助け合い活動連絡会に協力

江東区（東京都）

24日／江東区助け合い活動連絡会2022年度（第6回）総会が開催され、当財団も参加した。同連絡会は、江東



区で助け合い活動を行っている活動者のネットワーク形成と情報交換を行うとともに、関係する行政、社協も出席して情報提供を行っており、活動者と行政・社協との情報交換の場にもなっている。

同連絡会代表でさわやかインストラクターの渡辺恵司氏、連絡会副代表・吉野義道氏の開会あいさつの後、財団より「助け合い活動と居場所づくり」と題して、居場所の意義と立ち上げのポイントについて、財団制作の「居場所ガイドブック」を基に説明した。地

域がつながりお互い様の助け合い活動を広げるため、あらためて居場所の意義や効果について活動者に伝えたいとの事務局の思いから、総会のプログラムの一つとして組み入れられた。

その後、総会報告書の提案、区と区社協からの情報提供、参加団体からの活動紹介が行われ、終了した。

同連絡会は、住民主体で助け合い活動を進めていこうと活動者である住民が主体的に立ち上げ、自治会等の地域住民、NPO、ボランティアグループ、介護事業者のほか、区と区社協も参加し、助け合い活動の普及・啓発活動を行っている。活動者は自らの思いで参加しており、毎回非常に活発な情報交換が行われている。こうした行政も含めた活動者同士の連携の場があることは、住民の思いを形にし、それを継続していくために非常に効果的であり、今後も応援していきたい。

(岡野)

(本稿は、岡野貴代、高橋望、長瀬純治)

ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナーは、本財団の趣旨にご賛同いただき、財政的・精神的にご支援くださる賛助会員の皆様です。会費は寄付金の一種として大切に活用させていただきます。新規ご入会の会員の方、会員をご継続いただきました皆様も毎号ご紹介いたします。また、個別のご寄付をいただきました皆様もご紹介させていただきます。

(敬称略) (2022年5月1日～5月31日財団受付分) ※なお、自動振替の場合等、処理日と財団受付日にずれが出て掲載時期がずれる場合がありますご了承ください。

さわやかパートナー個人(127件)

(都道府県別50音順)

北海道	中村 久美子	青柳 邦雄	金平 輝子	村本 久夫	近藤 弘	山梨県	伏原 英二	中村 順子
竹内 修一	群馬県	阿部 まさ子	河崎 栄一	望月 明美	杉山 孝博	近藤 陸子	松原 彰雄	藤本 幸延
星川 光子	岡野 光利	飯野 奈津子	五味 朗	森 妙子	鈴木 安尚	長野県	三重県	奈良県
宮城 豊	埼玉 健次	上田 恭子	頃安 健司	安原 三紀子	玉置 英明	有賀 一三	大西 彰夫	稲田 禮子
伊藤 壽朗	滝口 健次	宇野澤 虎雄	清水 敦子	横田 洋子	服部 恵津子	河野 孝子	京都府	岡山県
土肥 強	寺島 知子	梅田 義夫	城野 東太	渡辺 市郎	福田 昌子	塩原 律子	梶 宏・寿美子	宇野 均恵
茨城県	土井 猷治	大井 利雄	鈴木 裕	神奈川 県	堀田 宏樹	野村 尚	坂元 和夫	谷 敬子
小松崎 和子	千葉 県	太田 喜代子	城 祐一郎	天野 武和	松下 晃久	古川 晴雄	大阪府	広島県
関 正夫	坂口 崇治朗	大野 恒太郎	竹内 孝仁	池田 高志	三浦 靖夫	岐阜 県	伊左次 清子	今崎 仙也
平沢 光子	鮫島 収	大山 綱明	城 祐一郎	岩田 恵美子	安原 久咲子	高柳 淑子	大道 直行	角川 克己
前畑 安宏	島 利榮子	奥谷 信子	谷山 尚	大石 恵子	山本 千恵	静岡 県	児玉 恭教	栗原 捷子
森下 英子	宮本 和夫	押切 謙徳	新津 ふみ子	小沼 幾久雄	吉田 久美子	愛知 県	田中 茂雄	高場 憲夫
栃木 県	本吉 正男	勝力 男	藤井 良子	桑野 映美	渡部 治夫	土屋 幸己	中原 和之	濱崎 雄司
岡本 優子	東京 都	加藤 洋一	松友 祐子	小林 重敬	須田 恒夫	新潟 県	人見 滋樹	香川 県
				古村 昭夫	須田 恒夫	大澤 澄男	兵庫 県	松本 林
						河原 朗治	米田 鶴子	愛媛 県
						近藤 豊彦	多田 陸美	松原 一紘

福岡県

小出 まさる

角 洋一郎

長崎県

瀬口 卓也

大分県

清家 修

畑 昭子

宮崎県

岡上 マチ子

鹿児島県

鹿兒島県
富永 泰子

さわやかパートナー法人(14件)

(50音順)

内村物産株式会社

京セラ株式会社

社会福祉法人五泉市社会福祉協議会

NPO法人

さわやか福祉の会流山ユー・アイネット

株式会社シーエスエス

公益財団法人住友生命健康財団

一般社団法人全国農業協同組合中央会

認定NPO法人東葛市民後見人の会

有限会社ナースケア

日本郵政グループ労働組合

ハート公所つきみ野

日立金属株式会社

三菱重工株式会社

有限会社ヤマダ

一般ご寄付(5件)

(50音順)

社会福祉法人江戸川区社会福祉協議会

(5千円)

太田 昭(10万円)

加藤 孟(1万円)

富士急行株式会社(1万円)

松原 彰雄(1万円)

地域助け合い基金ご寄付(1件)

(ご寄付日付順)

宇野 均恵(1万円)



さわやか福祉財団の活動を ぜひご支援ください。

■さわやかパートナーの皆様には、『さあ、言おう』 を毎月お手元にお届けいたします。

さわやかパートナーは、さわやか福祉財団の理念と活動に共感し、会員としてご支援いただく賛助協力者の皆様です。

■寄付金は税金の控除対象となります。

個人年会費

Aコース 10,000円
Bコース 3,000円

法人年会費 (1口)

Aコース 100,000円
Bコース 20,000円

一般ご寄付をいただく場合のお振込口座

口座名義：公益財団法人さわやか福祉財団

郵便払込 00120-9-668856※

三菱UFJ銀行 浜松町支店 普通預金
口座番号 3731714

りそな銀行 芝支店 普通預金
口座番号 1174297

※手数料不要の郵便払込取扱票をご用意していますので、お申し出いただければ郵送いたします。

※いずれもお問い合わせは、編集部あるいは社会支援促進チームまでお気軽にご連絡ください。
(mail@sawayakazaidan.or.jp)

NEWS

& にゅーす



2022年度

さわやか福祉財団 全国交流フォーラムを 開催しました

5月25日、「2022年度さわやか福祉財団全国交流フォーラム」をご支援者の皆様やさわやかインストラクタ

ーなどー40名の方々にご参加いただいて開催しました。会場は、第一部は東京・墨田区のKFCホール、第二部は同第一ホテル両国。全国交流フォーラムは、新型コロナウイルス感染症の拡大によりここ数年開催を見合わせていましたが、昨年11月1日の「創立30周年2021年度さわやか福祉財団全国交流フォーラム」に続いての開催となりました。

第一部のプログラムでは、開会に続いて清水肇子理事長より「新地域支援事業の取り組み及び全体の事業と運営について」の報告が行われました。冒頭、30年にわたる当財団の活動の大きな支えとなっている遺贈によるご寄付



をいただいた皆様に対し、あらためて感謝の思いを表するため黙祷を捧げ、続いて「創立30周年2021年度さわやか福祉財団全国交流フォーラム」開催の報告が行われました。

事業に関しては、当財団の原点である「新しいふれあい社会の創造」という理念を確認して、新地域支援事業に

対する取り組みの状況、地域共生社会の実現に向けた取り組みとして、「いきがい・助け合いサミット」「地域助け合い基金」等の説明を行い、その他社会参加推進事業、情報・調査事業の状況についての報告が行われました。

最後に、すべてのご遺贈者を思う「思恩忌」を執り行っていることが報告され、全国で共生・共助の仕組みづくりが急務であり、地域共生社会づくりに向けて全力で取り組んでいく決意が示されました。

続いて、堀田力会長、清水理事長の進行によるトーク「地域共生社会実現に向けて」地域共生社会づくり活動はどうすすめるか?」が行われました。まず、堀田会長が、「人間開花主義による地域共生社会の実現（財団の目指す社会）」をテーマに、人間性を優先する人間開花社会の実現こそが求められること、その実現に向けて民間非営

利活動が有効であり、求められていることを訴えました。

次に、同じく堀田会長から、「いきがい・助け合いサミット in 東京」のプログラムについて、全体シンポジウム、分科会の構成、狙いが説明され、全体像が示されました。

その後は、助け合い支援、市区町村における住民活動の拠点づくりという財団の主たる活動の詳細について、担当リーダーを交えてトーク形式により報告が行われました。

第2部「さわやか交流会」は、場所を第一ホテル両国「清澄」に移して約100名の参加を得て開催されました。開始にあたって、

駆けつけていただいた被災地からの皆様、企業、行政の方々やNPO・ボランティア活動に深いご理解とご支援を寄せていただいている皆様方をご紹介して乾杯が行われ、その後は、皆様の交流の場となりました。新型コロナウイルス

イルス感染防止のため、参加者全員が着席しての開催となりましたが、限られた時間の中、和やかな雰囲気での交流が行われました。

当財団にとって、昨年の創立30周年交流フォーラムに続き、皆様からの温かいご支援に勇気づけられるとともに、あらためて理念の実現に向けての思いを固める機会となりました。（内田 信幸）



都道府県ごとの助け合い推進チームづくりに向けて議論

ブロック全国協働戦略会議を開催

去る5月26日にさわやかインストラクター（以下、インストラクター）とのブロック全国協働戦略会議を東京・墨田区のKFCホールで行いました。コロナ禍のため、オンライン参加も併せて70名弱のインストラクターらの参加となりました。全国からの多くの皆様が顔を合わせての議論はおよそ3年ぶりです。目的は当財団の情報センター化に向けた都道府県ごとの体制づくりをどう進めていくかを議論することでした。会議開催前に事前アンケートを配り、その回答として、各ブロックや都道府県での取り組みや課題を提出してもらい、各地の状況も共有しながら進めました。今年2月と3月にブロックリーダーを対象にしたオンライン会議で、都道府県の体制づくりに向け



ての説明と意見交換を行ったこともあり、その後、各ブロックや都道府県ごとに会議を開催し議論を始めている地域もありました。

会議は、清水肇子理事長のあいさつ

からスタート。まず、9月1・2日に開催予定の「いきがい・助け合いサミットin東京への協力について」として、サミットの趣旨や概要の説明とインストラクターへの協力依頼について、清水理事長と内田信幸事務局長が説明しました。4年前に大阪でスタートしたサミットも、3回目の集大成。協働者のインストラクターと共に、全国からの参加者の皆様を快くお迎えできるようにと、主な役割も共有しました。

これからの財団の方向について

情報センター化とインストラクターの地域支援について説明し、質疑応答で理解を深めました。これまでも何度も共有してきたテーマではありますが、堀田力会長が比喩表現で分かりやすく説明し、また、県ブロックの新メンバーに対する勉強会の依頼など都道府県単位への移行にあたっての具体的な質



問に清水理事長が回答しました。多くのインストラクターたちは「理解が進んだ」とアンケートに答えており、「事例は分かりやすかった」「軸足を県単位として、地域づくりと地域やさまざまな貢献活動ができる方々を発掘していきたい」など前向きな声が寄せられています。

都道府県単位ブロックに向けて

各ブロックの取り組みや課題などを発表してもらい、全体で共有しました。新地域支援事業がスタートして8年目、助け合いを広げる事業（生活支援体制整備事業や総合事業等）は都道府県ごとに共有され、市区町村ごとに計画されています。インストラクターが、都道府県ごとの取り組みや市区町村のSC・協議体等に関わるなど、すでに都道府県単位ごとに活動してきたブロックからは、具体的な取り組み状況や今後の計画について発表がありました。都道府県内で共に助け合いを推進するSC・協議体や実践者などを「助け合い推進パートナー」と呼び、パートナーを見つけネットワークをつくっていくと取り組み始めようとしています。また、都道府県に分かれると1名になつてしまう県や、インストラクターが



いない県を抱えているブロックもあり、ブロック内で協力し合いながら推進しようというところもありました。今後、都道府県単位化は徐々に進んでいくこととなりますが、多くの地域がこれまでの13ブロックで時には集まったり、オンライン会議をするなどし、緩やかなネットワークは続けていこうという

様子でした。

Jリーグへの感謝状贈呈式

長年、多大なご支援を頂戴しているJリーグへの感謝状贈呈式を行いました。今年3月に就任された野々村芳和チェアマン、高田春奈理事、鈴木順社会連携部長がお越しくださり、目録の授与と感謝状の贈呈を行い、さわやかインストラクターと拍手で感謝をお伝えしました。野々村チェアマンからは、「幸せなエリアを問われる時代。さわやか福祉財団は各地域に根づいていて、みんなを元気づける活動をしている。それはJリーグも同じ」というメッセージをいただきました。

※目録授与式と感謝状贈呈式の様子は、6月号表紙裏にもあります。

今後に向けての議論

各ブロックの発表を受けて、堀田会

長の進行で「どの都道府県にも何らかに進んだ仲間で広げようという事業や試みがある。そこに入り、住民主体の助け合いを広げていこうと伝えながら、広げていくことも一つの方法。この活動は仲間づくりが目的ではなく、究極の目的はどの地域でも誰もが幸せを実感できるように助け合いを広げること」と何のために活動するのかを確認し、参加者全員で議論に入りました。

ゼロからの体制づくりではなく、着目したのは各都道府県でSC・協議体や担当行政等を対象に取り組まれている研修会やアドバイザー派遣等の事業、または都道府県や都道府県社協、助け合い実践者等に声をかけてつくっている推進チームなどです。事前アンケートに書かれていた事業やチーム名などを共有し、さらに、関わっている取り組みを手上げで披露してもらい共有しました。

また「どこに自分たちのポジションニングをしたらいいか戸惑う声も」という意見も出されました。インストラクターの助け合いを広げる事業への関わり方はいろいろです。「行政との関わりは得意ではないが、助け合いの実践をコツコツ続けていきたいという立場も大切」などの意見もありました。

最後に、堀田会長から「県単位で活動を広めていくためのパートナーづくりも大切だが、もっと大事なのがそれぞれの都道府県内に助け合いが広がること。助け合いを広げながら仲間づくりも進めていこう」と呼びかけました。インストラクターの皆さんは、多様な各地の取り組みも共有しながら、時には全体で共有しながら、各都道府県ごとの体制づくりに取り組みを進めていきます。

(鶴山 芳子)



さわやか活動日記(抄)

〈2022年5月1日～5月31日〉

社会参加推進事業

社会人地域共生活動
参加推進プロジェクト

高連協役員会開催

〔5月19日〕

高齢社会NPO連携協議会（高連協）の役員会を、NPO法人高齢社会をよくする女性の会理事長樋口恵子氏と当財団会長堀田力両共同代表以下7名の理事及び監事1名、オブザーバー1名、計11名が参加してウェブ会議

形式で開催した（欠席者3名は委任状提出）。議題は、来る6月20日開催の総会に向けて、①2021年度事業報告の件、②21年度決算承認の件の2件の決議と6月総会に伴う新役員体制について。結果、2決議案は全員一致で承認され、新役員体制は新理事候補として大内尉義氏（一般社団法人日本老年医学会）と中村一朗氏（一般財団法人医療経済研究・社会保険福祉協会 医療

経済研究機構 国際長寿センター（日本）の2名、新参与候補として現理事の大上真一氏（一般財団法人医療経済研究・社会保険福祉協会 医療経済研究機構 国際長寿センター（日本））とし、両共同代表はじめ、他理事及び監事は重任とし次回総会の議決に諮ることとした。（玉置）



退職のお知らせ（5月13日付）

■飯久保 寛幸さん

飯久保さんは、当財団に長い間多大なご支援をいただいている大手生命保険会社を退職後、2011年から当財団でボランティアとして、主に寄付文化の醸成に努められました。また、在職時の経験を生かして各プロジェクトの財務管理や主要会議の議事録作成・管理など、さまざまなプロジェクトで活躍していただきました。今後のますますのご活躍をお祈りいたします。

事務所だより

●「いきがい・助け合いサミット in 東京」の開催が迫る中、財団では、社会参加推進事業のTさんが「移動奉行」として、当日会場を訪れる皆様が安全に移動できるよう、現地調査に出向くなど奮闘中。その他の職員も、それぞれの持ち場でサミットに向けて着々と準備を進めています！

助け合いの仕組みづくりをさらに進めよう

情報紙

『さあ、やろう』 vol.19発行!

生活支援コーディネーターと協議体の取り組みを考える情報紙『さあ、やろう』。

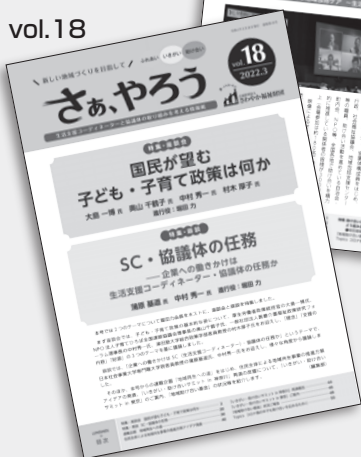
新地域支援事業に携わり、地域における助け合いの仕組みづくりを進めている方々の参考となる記事を掲載し、全国の関係者の皆さんに頒布しています。また、財団ホームページからもダウンロードできます。

【vol.19目次】

- *「いきがい・助け合いサミット in 東京」プログラム紹介
- *特集・鼎談
刑事政策と社会福祉と地域社会をつなぐ!
- *特集 子ども・子育て政策と財源 堀田 力
- *連載企画 地域再生への道
＜基金の紹介＞埼玉県さいたま市・岡山県倉敷市
- *「地域助け合い基金」状況ご報告
- Topics コロナ禍の中でも助け合いを広めるために

財団HPトップページ→「マガジン」→「ライブラリー」にお進みください。

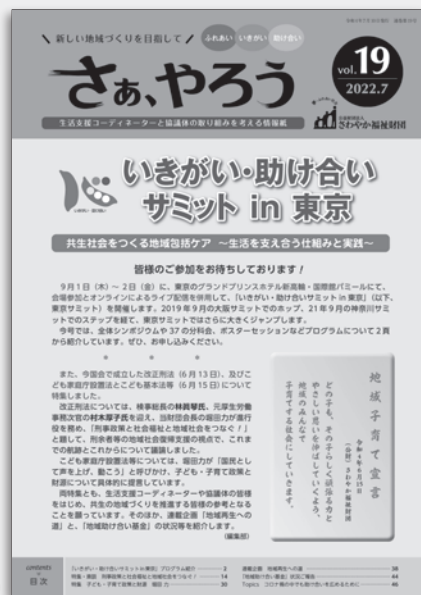
vol.18



vol.17

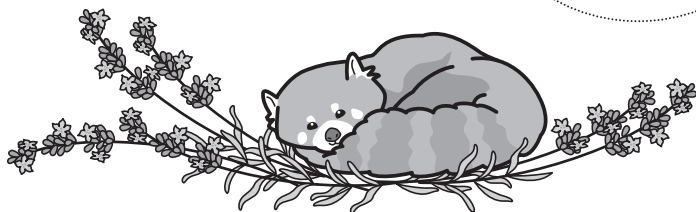
vol.17

vol.19



【お問合せ】メール post@sawayakazaidan.or.jp
電話 (03) 5470-7751

みんなの広場



5月25日に開催した「2022年度さわやか福祉財団全国交流フォーラム」で、参加者の皆様にはアンケートにお答えいただき、ありがとうございました。たくさんの方の貴重なご意見を、今後の財団の活動の参考とさせていただきます。今月号では、そのお声の中からご本人の了解を得て、一部を紹介させていただきます。

内海 春雄さん（68歳）

宮城県塩竈市

今後はさわやか丸を利用し、島民に対しての買い物支援という形で協力できないかと考えております。

これまでの地域共生社会、助け合い活動の構築に感謝しております。さらに今後、地域シニアが子どもたちと共に遊び、共に喜び、子どもたちの健全な成長を支える方向性は大賛成です。国の政策も、子どもを産み育てられる方向に進んでもらうことを望みます。

小沼 光歩さん（64歳）

東京都江戸川区

コロナ禍により一時途絶えていた地域のつながりも、やっと回復に向かい始めました。この2年間で学んだ多くのことを、皆様がそれぞれの活動や取り組みに生かしています。

行政主導でないプラットフォームづくりは、ぜひ推進していただきたいと思っています。自主・自律の地域づくりこそ、住民が強くなる道筋です。

今後の社会を考えたときに必要なことは、地域が主体となり、多世代が協働して創り上げていく互助の取り組みであると考えます。また、支えられる人たちが支える側にもまわれる地域づくりも必要だと思いました。

加藤 陽子さん（45歳）

東京都江東区

ケアマネジャーとして働きつつ、地域活動を行っています。活動の中で感じていることは2点で、専門職、住民共に同じ課題です。

①個人や団体が「点」で頑張っており、

人の持つ掛け算的な仕掛けがない
(つながり広まらない)。

②地域全体を見てデザインする人がいない(まとまらない)。

時代の変化が加速している中、「つながり方」をどのようにデザインし広げていくための仕掛けをつくるか、いつも勉強させていただいています。

渡辺 恵司さん(81歳)

東京都江東区

「江東区助け合い活動連絡会」を、区内52活動団体、行政、社協と実施。また、在留外国人居住者との交流「みんなで多文化交流 in 大島」を行っています。

東京都の場合、行政区別で活動しながら、フォーラムまたは研究会等で近隣区との交流を広げながら各地にサポーターを増やせればと願っています。それにはまず、財団で仕掛けていただけると進みやすいと考えています。



渡辺 誠さん(75歳)

東京都千代田区

私どもは、バスケットボールを通してシニア世代の交流交歓を目的に活動しています。

交流フォーラムに参加して、地域共生社会の実現に向けて全国のパートナーたちが、助け合い工夫して努力している姿は非常に参考になり、活動の原動力になります。

私どもの活動は、すべて自助・共助の類い。楽しめる場の提供のための公助(助成)について何らかの仕組みをつくらなくてはいけないと考えています。

菅原 由美さん(66歳)

神奈川県藤沢市

寒川で、日本葬の赤ちゃん食堂ができました。育休中から地域で仲間がつかれるのはとても大切だと感じます。

3人の里親を25年やって、子どものサポートこそが大事だと強く思っています。財団の活動が子ども・子育てに進んでいくことは、とてもうれしいです。

油井 法典さん(59歳)

長野県長野市

7年前の地域支援事業のSCや協議体設立の頃、財団の方と連絡を取り事業を実施。7年ぶりに戻ってきたので、財団の現況や考えをお聞きしたかった。子ども政策などいろいろ伸びてやっていることがよく分かりました。

阿部 かおりさん

福岡県行橋市

2025年まであと少しなので、住民サイドでは出来上がってきたものをみんなで発表する場がつけられ、確認しながら進んでいるための段階の講演依頼が増えてるように思います。

コロナのこともあってだと思いますが、財団の考えを久しぶりに聞く機会となりました。



今後、みんなの広場への投稿をお待ちしています！

「払込取扱票」による振込手数料について

ゆうちょ銀行の手数料取り扱いが今年1月17日に変更となり、本誌貼付の「払込取扱票」をご利用いただく場合も、現金による送金の手数料はご本人負担となりました。

ご理解のほどよろしくお願い申し上げます。

私たちと一緒に、 誰もが安心して暮らせる 地域共生社会をつくりませんか？

さわやか福祉財団は、皆様のご支援によって活動しています

さわやかパートナー（賛助会員）として、
ぜひご支援ください。



個人会員、企業・団体等の法人会員ともに、
どなたでもお申し込みいただけます。また、税制優遇措置もあります。

◎ お問い合わせは当財団まで 電話 (03)5470-7751 ◎

表紙絵に
はり絵・池田げんえい

「海だーッ！」

編集後記 ●地域全体で育む子どもの共感力と、当財団制作「ともあそび」冊子について、理事長が巻頭言で書きました（P2～）。●「挑む！ 我らの地域づくり」は、佐賀県太良町から。国の事業を活用し、仲間を増やして地域の課題解決に取り組む人々たち取材しました（P4～）。●「活動の現場から」は、過疎が進む東北のまち、軽米町。こちらも仲間を増やして課題を解決しながら前に進んでいます（P11～）。●歳を重ねてもやりたいことにエネルギーを注げる環境。自分事として考えてみたいですね（P22～「老いの暮らしを創る」）。

助け合いを
広げよう!



高祖 常子

幼いころ叩かれた子は

大人になったとき、叩かれた理由をほとんどが覚えていない。

叩かれた記憶に悩み苦しみ、生きる人も。

叩かないと決める。

そこから親子のコミュニケーションが広がる。

親も、子も困っている。

周囲には、きっと優しいまなざしがある。



●認定NPO法人
児童虐待防止全国ネットワーク理事
島が好きで、社会人になったころは、伊豆
諸島や沖縄の島をかなり制覇しました。
礼文島・利尻島に上陸したことも。著書は
『感情的にならない子育て』（かんき出版）
ほか。3児の母。

7月号

通巻347号 2022年7月10日発行
(毎月1回10日発行)

表紙絵 池田げんえい
イラスト すずきひさこ
福島康子

レイアウト 菊池ゆかり

印刷所 日本印刷株式会社

発行人 清水肇子
発行元 公益財団法人さわか福祉財団
〒105-0011
東京都港区芝公園2-6-8 日本女子会館7階
Tel (03)5470-7751 Fax (03)5470-7755
E-mail pr@sawayakazaidan.or.jp
<https://www.sawayakazaidan.or.jp>
Printed in Japan

無断複写・無断転載はご遠慮ください©

締め切り間近！ いきがい・助け合い サミット in 東京

8月1日まで参加お申し込み受付中

開催日

2022年 **9月1日(木)・2日(金)**

会場

**グランドプリンスホテル新高輪・
国際館パミール**

住 所：東京都港区高輪3-13-1
最寄り駅：新幹線・JR線・京急線 品川駅（高輪口）
都営地下鉄浅草線 高輪台駅



開催形式

**会場参加・
オンラインによるライブ配信併用**

※コロナ禍が収束していても、併用で開催します。

主な内容(予定)

- 全体シンポジウム
- 分科会 第1部から第3部まで37分科会
- ポスターセッション
- 全体発表会 ● 大交流会 など

定員

会場参加1,500名 オンライン視聴3,000名

主な対象

生活支援コーディネーター、協議体構成員、地方自治体、社会福祉協議会、地域包括支援センター等の地域づくり関係者、国・関係機関・NPO・民間団体の関係者等、助け合い支え合う地域づくりに関係する方、その他関心を持つ一般住民 など

参加費

資料代 2,000円／1人 (税込。会場参加、オンライン視聴共)
大交流会 別途 3,000円／1人 (税込)

お申し込み締め切り

8月1日(月)

お問い合わせ 電話：(03) 5470-7751 (事務局 内田・徳間)

◆開催情報は財団ホームページ ▶ <https://summit.sawayakazaidan.or.jp>
でもご覧いただけます。